

## 入選

### 温かい手

熊本県 熊本大学教育学部附属小学校

5年 楠本悠輝

「よし！あと少しだ。」

くじけそうなぼくの心を、朝の友達の温かな手が包んでくれ、最後の力をふりしぼった。

今年の夏、芦北で5年生のメインの行事である、2泊3日の臨海学校があった。この日に向けて、事前学習はもちろん、2日目にある300m遠泳のために、毎日みんなで一生けん命練習を頑張っていた。

当日は晴天。とても暑かった。ぼくはドキドキ楽しみ半分、少し不安な気持ち半分で出発した。1日目は、水俣資料館で学習の後、遠泳の練習。初めて入る海に緊張があり、いつも学校で練習していた感じがつかめず、不安で夕食もあまり入らなかった。

2日目の朝、少し気分が悪くなり、目まいがして倒れそうになった。友達が心配し、保健室に連れて行ってくれた。今思えば、前日ぐらいからドキドキして、気持ちが弱っていたのだろう。横になりながら、これまでみんなで完泳できるように一生けん命練習したのだから、逃げたくない気持ちと、きつさで休みたい気持ちが混じり、この日に限って体調が悪くなった自分に、泣きたい気分だった。

友達は、心配そうにじっとぼくを見つめていた。もう、ほかのみんなは遠泳の準備で外に出ているのに、不安なぼくの横で、ぽんと背中に手をずっと置いてそばにいてくれていた。ぼくはどんな言葉よりもどんな薬よりも、その手がとても心地よく感じ、きつさが和らいでいった。

そして、ぼくは海に向かった。「絶対、泳ぎ切るぞ」と、今までにあった「休もうかな」という迷いも消えた。1番目の人が泳ぎ始めて、次は自分。ドキドキしているぼくに、背中に置いてくれた友達の温かな手が、自分をあと押ししてくれたような気がした。広い海で少し恐くなったけれど、みんなで泳いでいるようで、きつくても泳ぐぞ、と力をふりしぼって泳いだ。

無事、全員完泳をすることができ、自分1人で泳ぎ切ったことより、みんなで完泳できたことが、本当に涙が出るくらい嬉しかった。完泳してみんなで見る海は、来たときよりキラキラと輝いていた。

友達がぼくの背中に置いてくれた、温かい手から伝わる優しさは、ぼくの心に染み、元気をくれた。相手のことを思いやる気持ちこそ、言葉がなくても人に勇気を与えたり、元気にしたり、幸せにしてくれるすてきな力だと思う。ぼくは、友達の親切を一生忘れないだろう。

そして、あのとき言えなかった言葉を伝えたい。「ありがとう。」と。